

第 20 回 日本認知症ケア学会大会 京都

2019 年 5/25(土)～26(日)

食行動の異常が見られた認知症高齢者に個別的ケアを行った一例

特に盗食・掻き込み食事行為に対して

渡辺病院 D2 奥ひとみ 林春香 竹田恵美 矢富かおり 黒木亜沙美

【はじめに】 認知症高齢者における食行動の異常には、拒食、異食、盗食などが見られるも、原因も明らかではない。それらへの対応に苦慮することが多く、効果の定まった方法は、今だにないと思われる。今回、我々は、盗食、掻き込み食事行為が見られた認知症高齢者に対して、個別性を重視したケアを行ったところ改善がみられたため、若干の考察を加えて報告する。

【倫理的配慮】 本研究に対して、施設管理者の承諾、家族の同意を得、個人が同定されないように配慮した。

【対象】 A 氏 60 歳代、女性、アルツハイマー型認知症、X-5 年から物忘れ出現し、徘徊著明にて精神科認知症病棟へ入院。その後も、徘徊、脱衣行為が著明なため、X 年当院認知症病棟に転院となった。要介護 3、認知症高齢者の日常生活自立度 M、障害高齢者自立度 A2、改訂長谷川式簡易知能評価スケール 0 点

【結果】 入院時より、徘徊、盗食が著明であったため、食事時に個人用のテーブルを用意したところ徘徊、盗食は消失した。しかし軽量の椅子をガタガタ鳴らすため、重量の大きい椅子に変更した。次に配膳された食事を一度にすばやく掻き込む食事行為が見られた。窒息、誤嚥を防ぐため、小さいスプーンを用意し一品ごとの配膳としたところ、掻き込み行為は改善した。今度は、プラスチックのコップを噛み砕くことが見られた。コップを速やかに回収したが、その後、指しゃぶり、指噛みが見られたため、プラスチックのコップの代替として金属のコップを提供した。その後患者さんの歯芽への影響もなく経過した。

【考察】 食行動の異常には、心理的または環境要因が背景にあることが多く、今回我々は、盗食、掻き込み食事行為に至る経緯を慎重に観察し、その都度個別的に対応したところ、軽快したため改めて、個別的ケアの重要性を再認識した。

736 文字